ヘブル人への手紙10章1－18節 「罪を除き去るいけにえ」

1A かえって思い出される罪 1－4
2A キリストのからだ 5－10
　1B いけにえの指し示すもの 5－7
　2B ご自身のからだ 8－10
3A 一つのいけにえ 11－18
　1B 永遠の聖別 11－14
　2B 罪と不法の赦し 15－18

本文

ヘブル人への手紙 10 章を開いてください。今日の箇所は、ヘブル書の中で、最も高みにあるところだと思います。登山で言えば山頂です。著者が、キリストが大祭司として成し遂げられたわざを、語りつくすところであります。その恵み、キリストが成し遂げられたことに基づいて、あなたがたは、こうしましょうと呼びかけ、勧めが始まります。それが後半、19 節以降です。今日は、午前中に前半部分、1 節から 18 節を見て、午後に 19 節以降を一節ずつ見ていきたいと思います。

私たちは、8 章から著者が、キリストの大祭司としての奉仕をまとめ上げています。そこで語り始めたのが、新しい契約です。ユダヤ人たちは、モーセを仲介として契約を与えられていましたが、彼らが契約を破ったので、神はその契約を更新してくださいました。それが新しい契約です。そして、9 章では、キリストが地上の幕屋ではなく、まことの神の住むところ、天において、ご自身の流された血を携えていかれたところを見ました。

これらの学びは、旧約聖書の知識がないと難しいかもしれません。いけにえの制度が、私たち日本人の間ではないからです。そこで私たちは、前々回と前回に渡って、そもそも、神が人に何を願い、何を行ってくださっているのかを見てきました。神は、初めに造られた人が罪を犯してご自身から離れたので、人をご自身に取り戻すべく動いておられることを見ました。それで契約を結ばれます。初めの契約をイスラエルが破ったので、それで新しい契約を結ばれたことを見ました。次に、神は元々、ご自分のかたちに造られた人と、共に住みたい、交わりたい、一つになっていたいと願われています。そのためにエデンの園がありましたが、そこから離れていったので、イスラエルの民に幕屋そして神殿を設けられました。そして、ついにキリストご自身が私たちと共に住まわれ、この方が天に昇られた後には、御霊によって私たち共にいてくださいます。そして、終わりには、天地が過ぎ去って、新しい天と新しい地が造られた時に、天からのエルサレムをもって、神は私たちと一つになります。

このようにして、もっと平たく 8 章と 9 章を眺めてきました。10 章も、同じようにしたいと思います。それは、「血による、罪の清め」です。前回、私たちは、9 章 22 節で、「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」と学びました。

そこで、私たち日本人の持っている、汚れについて軽いノリについて取り扱いました。お祓いもありますね。そこには、ちょうど部屋をとてもきれいにしたような、そういった清浄な姿はありますが、聖書が言っている罪は、そういったものではありません。聖書を読み始めたら、人間の生々しい姿が、徹底的に出てきます。生まれた息子の兄が弟を殺すというところから始まりますね。私は、神道を比較的熱心に信じている人と対話したことがあります。話がかみ合わなかったのは、「罪」についてです。こんな反応でした。「ずいぶん、深刻なんですね。」もっと楽しく生きたらどうですか？みたいな、ご感想でした。罪を人が犯し、その報酬が死ということについて、あまりにも深すぎて、深刻すぎて、そこまで考えられないということです。罪と死というようなことを考えること自体がタブーしされる、穢れると考えるのではないでしょうか。

しかし、日本人であっても、週刊誌に出てくるような赤裸々な話はよく知っています。そして、表に出さないでいるだけで、根深く、その罪深い姿があると知っていながら、それでも、きれいにしておけばよいのだという考えがあります。しかし、真正面から、人間のありのままの姿を見せて、なおのこと希望を示しているのが、聖書の神です。けれども、この方は、全ての罪から離れている、聖なる神なのです。聖なる方が、いかに罪深い私たちを受け入れるのか？という時に、血を流すということがあるのです。それは、深い愛と憐れみに基づいた犠牲です。汗水を流して子供を育てたというのも労苦を表す犠牲ですが、血を流したと言えば、まさに犠牲を払った究極の姿ですね。それが、血を流すことによって、罪を赦すということです。

それで、旧約の時代は、いけにえの制度がありました。牛や羊、やぎを屠り、その血を祭壇に注いだり、聖所にあるものにすべて振りかけることによって、罪が赦され、清められるようにしました。しかし、そのいけにえさえが、人の罪を完全に取り除くことができなかったのだよというのが、ここ 10 章の内容です。しかし、御子の流された血は良心からすべてを清めます。

1A　かえって思い出される罪　1－4

[1] 律法には来たるべき良きものの影はあっても、その実物はありません。ですから律法は、年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって神に近づく人々を、完全にすることができません。

私たちは、旧約聖書の役割、律法の役割をというものをずっと見てきました。それは、後に来るものを指し示しているものなのだ、ということです。ここで著者は、来るべきものの影と表現しています。ですから、旧約の時代に生きている信仰者は、その来るべき良いものを切に待ち望むことによって、その信仰を働かせながら、律法を守り行っていたのです。

問題は、そのことを知らずして、これらの儀式を行っていさえすれば、罪は赦され、清められると思っていたことです。影を実物だと思い込んでいる過ちです。イエス様は、自分たちが汚れないように細心の注意を払っていたパリサイ人や律法学者のことを、痛烈に咎めました。「マタ 23:25-26 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる。」私たちも、物理的に教会の儀式に参加しても、そこで信仰を働かせていなければ、その儀式が私たちを清めるわけではないことを覚えるべきです。

「年ごとに絶えず献げられる同じいけにえ」とありますが、これは、ヨム・キプール、大贖罪日とも、宥めの日とも呼ばれます。第七の月の十日、今の西暦ですと、大体 9 月下旬に行われますが、毎年、同じいけにえを、つまり、大祭司とその家族の罪のための雄牛を献げ、またイスラエル全体のための罪の清めのために、雄やぎを献げます。けれども、それは、あくまでも影なので、罪の赦しを完全に行っているのではないのです。

2 それができたのなら、礼拝する人たちは一度できよめられて、もはや罪を意識することがなくなるので、いけにえを献げることは終わったはずです。3 ところがむしろ、これらのいけにえによって罪が年ごとに思い出されるのです。

毎年、この時期になると大祭司が、いけにえを献げてきたわけですが、もし罪の赦しが完全に行われているのであれば、繰り返す必要がないのです。罪を意識しなくてよいはずなのです。ところが、毎年、この時期に行っているということは、まだ罪が赦されていないという意識があるからです。さらに、罪の赦しの確信を深めるのではなく、逆に、宥めの日が近づくごとに罪が思い出されていってしまうのです。

このことは、キリスト者の間でも起こるのではないでしょうか？実は、罪の赦しを信じたはずなのに、いつも罪の責めに悩まされて、それでむしろ、教会の活動や儀式に熱心になっているという強迫観念になっているのであれば、まさにここに書かれている、罪の赦しが完全であったことを受け入れていない証拠です。

4 雄牛と雄やぎの血は罪を除くことができないからです。

聖書には、「贖罪」という言葉があります。これは旧約におけるものと、新約におけるものでは意味が異なります。旧約では、「罪をおおう」という意味がありました。ノアに箱舟を造りなさいと神が命じられた時に、「箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。（6:14）」と言われましたが、その「塗りなさい」がヘブル語でコファル、覆うという意味です。アダムが罪を犯して、エバとともにエデンの園を出て行かなくならなければいけなくなった時のことを思い出してください。主が彼らに、

皮の衣を着せてくださいました。彼らは裸でいたことが分かって恥ずかしくなりましたが、神は、その恥を覆ってくださったのです。神の御前に出ることができるように、罪をおおう働きをするのが、「贖罪」の意味です。

ある人がこう説明してくれました。高級なレストランにおいて、白いテーブルクロスがかけられたところで、食事が出てきました。ある人がスープをこぼしてしまいました。すかさず、ウェイトレスのが白いナプキンをそこに置いて、あたかもまるで何もこぼれていないかのようにしました。すばらしいですね、けれどもその下には汚れがあります。そのテーブルクロスをクリーニングして真っ白にするまでは、汚れは残っているのです。これが「覆う」ということと「取り除く」ことの違いです。

その取り除きの働きをキリストの血が行います。新約においては、贖罪は「一つになる」という意味があります。キリストにあって神と一つになる、あるいは神と結ばれて、交わりをするという意味があります。単に罪をおおうのではありません。罪をおおうだけならば、外面的な、表面的な交わりを神と持つことはできますが、心からの、良心がきよめられた状態での神との交わりを持つことはできません。罪はおおわれるだけでなく、「取り除かれる」必要があるのです。

2A キリストのからだ ５－１０

1B いけにえの指し示すもの ５－７

5 ですからキリストは、この世界に来てこう言われました。「あなたは、いけにえやささげ物をお求めにならないで、わたしに、からだを備えてくださいました。6 全焼のささげ物や罪のきよめのささげ物を あなたは、お喜びにはなりませんでした。7 そのとき、わたしは申しました。『今、わたしはここに来ております。巻物の書にわたしのことが書いてあります。神よ、あなたのみこころを行うために。』」

これは、詩篇 40 篇からの引用です。ここに、これまで著者が説明していることが明確に書かれています。これまで、全焼のささげ物や罪のきよめのささげ物があったが、完全に神を喜ばせることはできなかった。そこで神は、ご自身の御子にからだを備えられました。そして、この肉体が、神のみこころを完全に行う、いけにえとなるということです。

イスラエルは、律法の中で神に従うようにしていましたが、神から離れていく歴史をたどりました。律法によって神の前に正しいものと認められるのではなく、ますます罪深い存在であることが示されることとなりました。しかし、いけにえの儀式だけはしっかりと守っていったのです。本来、神に近づくためにいけにえであったのに、その儀式を行っていても心は神から遠く離れており、形式だけになっていたのです。

イスラエルが、その背きの罪ゆえに滅ぼされるという国家危機にあるときに、次々と神は預言者

を遣わされました。彼らの多くが、いけにえによって神を喜ばせることができないと預言したのです。「イザ 1:10b-11 あなたがたの多くのいけにえは、わたしにとって何になろう。――【主】は言われる――わたしは、雄羊の全焼のささげ物や、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。」彼らの行ないは何も変わらない、いやますます悪くなっているのに、このようないけにえをささげても無駄だ、ということです。

預言者ミカはこう言いました。「6:6-8 何をもって、私は【主】の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のささげ物、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。【主】は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の背きのために、私の長子を、私のたましいの罪のために、胎の実を献げるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」公正を行わないのに、神に受け入れられるように、いけにえを献げていたのです。神の御心、神の命令に従わない不従順から目を背けて、その代わりにいけにえをささげることによって代替しようとしていました。私たちも、この傾向があります。主からの命令があり、その単純な命令に従わなければいけないのに、宗教的活動で補完しようとします。

しかし、神はご自分のひとり子であられるキリストが、肉体をもって生まれるようにしてくださったのです。5 節には、「わたしに、からだを備えてくださいました」と書かれていました。ベツレヘムの飼い葉桶にお生まれになったあの幼子は、動物のいけにえに代わる、神のためのいけにえとしてお生まれになったのです。あの肉と血は、引き裂かれて、血を注ぎ出されるためのものなのです。

そして 7 節には、「あなたのみこころを行うため」と書かれています。イスラエルは神の御心を行い損ねましたが、イエスは御心を全うされました。ゲッセマネの園において、主は、「マタ 26:39 それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」と祈られました。主は、ご自分が、罪のためのいけにえとなることが、父のみこころであり、それを行なわれたのです。

2B ご自身のからだ ８－１０

[8] 以上のとおり、キリストは「あなたは、いけにえやささげ物、全焼のささげ物や罪のきよめのささげ物、すなわち、律法にしたがって献げられる、いろいろな物を望まず、またそれらをお喜びになりませんでした」と言い、[9] それから、「今、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われました。第二のものを立てるために、初めのものを廃止されるのです。

イエスが、罪のためのいけにえとしてささげられた今、旧約におけるいけにえの制度は廃止されました。これを、神殿でいけにえを続けていた、ユダヤ人の信者たちはよく知っていかなければい

けないものでした。

ここで気を付けなければいけないことは、いけにえをやめなさいと、著者が訴えているのではないということです。著者がパウロである可能性は大きいですが、パウロ自身がエルサレムに来た時に、教会の指導者ヤコブの勧めに従って、清めの儀式を神殿の中で行っています。それは、ユダヤにいる兄弟たちが、パウロについての悪い噂を多く聞いていて、それが根も葉もないことであることを示すためです。また、ケンクレアでは、誓願を果たすために、髪を剃っています（使徒18:18）。パウロはユダヤ人であることをやめなかったし、また宣教のゆえに、ユダヤ人の前では律法の下にあるものように生きました。キリストの姿を彼らの間で示すためです。

では、問題は何か？それは、キリストを信じていることをはっきりさせ、告白しなければいけない時に、自分の属している共同体に居られなくなることを恐れ、信仰告白から離れてしまうことです。自分がキリスト者であることを公言せず、他の人たちと同じように生きれば、軋轢も出てこないし、圧迫も受けない。苦しみを受けることはない、生活に支障がでないと判断しているからです。それで、いけにえの制度の中で生きているのです。しかし、そのいけにえの制度は、もうすでに神の前では廃止されているのだよ、ということです。

これは、イエス様が言われたことにつながります。「マル 8:34b-35 だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」自分のいのちを救おうとするとは、自分の生活を優先させると言ってよいでしょう。自分を生かすために、イエス・キリストの福音をないがしろにしたら、その生活自体も失われていくよ、ということです。そして、福音のゆえに犠牲を払っても、その生活が違ったかたちで補われますよということです。

10 このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだが、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。

いけにえでは達成できなかったことを、キリストご自身のからだが、いけにえとして献げられたことによって、聖めが全うしました。ただ一度、ということが再び強調されています。「Ｉコリ 6:11 ｂしかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」この神の成し遂げられた聖めを、思いや行いにおいて日々、自分のものとして体得していくことになります。

私たちが聖なる者とされたことと、その後の聖めのための歩みの違いを、ある人がこう説明しました。私たちは、救われる前は泥沼にいました。けれども、キリストが救い出してくださり、泥沼から出て、地上におられてくださるようにしてくださいました。けれども、自分の体には泥がまだ付いて

います。それを洗浄していただくのです。泥沼から陸に移してくださったのは、神が私たちを救われる時に行われる聖めの働きです。残った泥を洗い流してくださるのが、今の聖めの働きです。イエス様はペテロに対して、次のように説明されました。「ヨハ 13:10a 水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。」全身はきよめられたのです。

3A 一つのいけにえ 11－18

1B 永遠の聖別 11－14

11 さらに、祭司がみな、毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返し献げても、それらは
決して罪を除き去ることができませんが、12 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、
永遠に神の右の座に着き、13 あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。

ここでは毎日の祭司たちの奉仕のことです。聖所に入り、燭台の灯に油を注ぎ、供えのパンを取り換え、食べるなど、日ごとに行っているものです。そして、イスラエルの子らが携えてきたいけにえを屠り、血を祭壇に注ぎ、その肉を焼きます。しかし、そのように繰り返しても、罪は除き去ることはできません。何度もやれば、効力を発揮するのではないのです。

ここで大事な言葉は「立って礼拝の務めをなし」というところです。罪の贖いをするために、座ることなく、立ち働いていました。その働きは完了することなく、くり返されていました。それとは対照的に、キリストは今、着座しておられます。立ち回っておられないのです、座っておられるのです。この違いは、立ちまわっているほうは、罪の贖いが終わっていないことを示していて、座っているのは、完成したから留まっていることを意味しています。そして、敵を足台とする、すなわち再臨によって悪魔の仕業を打ち滅ぼされるのです。（詩篇 110:1 参照）

14 なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたから
です。

これまでのいけにえは、何度も献げることです。けれども、キリストは一つのささげ物です。何度も献げるのは、まだ完成されていないからです。けれども、キリストご自身をささげた、ささげ物は完成されました。だから、途中で効力を失うことなく、永遠なのです。

キリストがあの時に十字架につけられた時、私たちの罪はすべて負われました。ですから、私たちは、キリストに信仰を置いたとき、すべての罪が赦されました。過去に犯した罪だけではありません。現在犯しているかもしれない罪、これから犯すかもしれない罪、過去・現在・未来のすべてが赦されたのです。これまでは赦してもらえたけれども、これから犯す罪は自分で頑張って犯さないようにしなければ、赦されないのでは？ということではありません。すべてが赦されました！

2B　罪と不法の赦し　15－18

15 聖霊もまた、私たちに証ししておられます。というのも、16「これらの日の後に、わたしが　彼らと
結ぶ契約はこうである。 ――主のことば――　わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、　彼らの
思いにこれを書き記す」と言った後で、17「わたしは、もはや　彼らの罪と不法を思い起こさない」
と言われるからです。18 罪と不法が赦されるところでは、もう罪のきよめのささげ物はいりません。

著者は、エレミヤ書にある新しい契約の約束を 8 章で話し始めていました。そして、ここでしめくくります。神の律法が、石の板ではなく私たちの心の中に置かれる、ということです。すなわち御霊によって心の一新が行われたということです。

そして、御霊によって一新される時に、罪が思い出されることのないほどの完全な赦しの確信が与えられます。思い出されないのです。これが、家畜のいけにえとの大きな違いです。何度も何度も、いけにえを携えてくるのですが、その繰り返しこそが、罪を思い出していることの証拠です。けれども、御霊が注がれて、罪の赦しが完全に行われたことを確信します。罪がすべて赦され、もはや思い起こされることもない、ということです。私たちは思い起こすでしょう。自分を責めます。けれども、主ご自身が思い起こされないのです。ここに、大いなる神の恵みがあります。

皆さんの中に、まだ罪の責めで苦しんでおられる方がいますか？何度も何度も、自分の罪を拭い去っていただこうとして、努力しませんでしたか？悔い改めましょう。その悔い改めとは、キリストの、ただ一度のいけにえを全き信頼で、信じることです。この方の愛は、それほど深く、永遠なのです。その全き赦しがあるからこそ、良心が清められて、それで死んだ行いを捨てる力が与えられます。